

# 探偵小説としての『フィラデルフィア・ファイアー』

大野 真

## 1. 序

本論では、アメリカのアフリカ系小説家ジョン・エドガー・ワイドマン (John Edgar Wideman 1941-) の代表作である『フィラデルフィア・ファイアー』 (*Philadelphia Fire* 1990) を扱い、とくにその現代都市における探偵小説的役割に注目したい。

まず、作者ワイドマンについて簡単に紹介する。『20世紀英語文学辞典』(研究社)の渡辺利雄の記述によると、ワイドマンは「Washington, DC 生まれ, Pittsburgh の黒人スラム街 Homewood 育ち, Pennsylvania 大学を優秀な成績で卒業」したとある。その後、大学で教鞭を取りながら、「黒人としての自らの過去の体験と白人エリート文化の中にいる現在の自分を見直す」ようになり、様々な作品を発表した。「作品の扱う主題、実験的な錯綜した文体、多様な視点からの語りによって 'black Faulkner' と呼ばれる」ことがあると説明されている。

以上の解説で言及されているウィリアム・フォークナー (William Faulkner 1897-1962) は、20世紀のアメリカ南部文学を代表する作家であるが、ワイドマンがフォークナーの黒人版として解釈されているのは非常に面白い点である。本論で扱うワイドマンの『フィラデルフィア・ファイアー』には、フォークナーの最高傑作とされている『アブサロム、アブサロム!』 (*Absalom, Absalom!* 1936) と共通した傾向があるのだ。とくに私が注目したいのは、両作品の持つ探偵小説的性格である。

まず、フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』においては、クエンティン・コンプソン (Quentin Compson) という白人青年が、トマス・サトペン (Thomas Sutpen) という男の一家に起きた殺人事件の謎を探る。その過程において、アメリカ南部の歴史の影の部分や人種問題が探究されていくのである。

一方、ワイドマンの『フィラデルフィア・ファイアー』では、カジョー (Cudjoe) という黒人の作家が、フィラデルフィア警察が急進的な黒人解放グループの拠点を爆破した事件の真相を探っていく。その中で、フィラデルフィアという都市の暗部や、そこに生きる黒人たちにまつわる様々な問題が浮き彫りにされる。

両方の作品とも、過去に起きた何かしらの事件 (殺人事件など) の真相を探るという構図を持ち、その点で探偵小説的要素を持つ。批評家のクリアンス・ブルックス (Cleanth Brooks) は、*William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* において『アブサロム、アブサロム!』をフォークナーの最高傑作としたうえで (295)、「素晴らしい探偵小説」 (a magnificent detective story) とも呼んでいる (315)。また、ワイドマンの『フィラデルフィア・ファイアー』については、作品中で主人公のカジョー自身が、「おそらくこれは探偵小説なのだ」 (Maybe this is a detective story) (46) と独白する場面があるのだ。

両作品を一種の探偵小説と見なしてみると、事件を探る探偵役は『アブサロム、アブサロム!』においては白人青年のクエンティン、『フィラデルフィア・ファイアー』では黒人作家のカジョーである。クエンティンとカジョーはそれぞれ作者フォークナーとワイドマンの分身と考えられる存在であり、両作品の事件の背景となっている人種問題が白人側と黒人側という対照的な視点から探究されていく点が興味深い。

そしてこれらの「探偵」役の人物たちは、事件の調査研究に関わる過程で、自分自身が深く影響されていく。クエンティンはサトペン家の殺人事件の背景にある人種問題や近親相姦の可能性といった南部の歴史の暗部を探究する中

で、南部人としての自己を振り返らざるを得なくなる。また、カジョーにとっても、黒人たちが権力の手によって焼き殺された事件を調べていくことは、黒人としての自分自身の在り方を探究する行為でもある。

「探偵」が事件に自分自身の状況を重ね合わせ、「被害者」や「犯人」に自己の姿を投影し、「探偵」と「被害者」、「犯人」といった区別があいまいになっていく。こうした役割の不確定性は、現代的な探偵小説の特徴でもある。内田隆三は『探偵小説の社会学』において、「探偵」や「語り手」が犯人であるような探偵小説に注目し、こうした作品においては、探偵や犯人といった役割が不確定になり、「探偵の同一性」が不安にさらされているとする。「これらの作品は古典的な探偵小説の形式を装いながら、他方でその同一性のたわむれを示唆あるいは表象している」(41)。いわば、探偵小説を超えた探偵小説、「メタ探偵小説」と言えるだろう。「探偵小説のたわむれを内容とするメタ探偵小説への移行において、重要なのは、探偵行為の主体がその同一性を失っていくことである」(64)。

本論では、こうした探偵小説の特徴に注目しつつ、『フィラデルフィア・ファイアー』の内容を紹介していきたい。

## 2. 失われた痕跡—行方不明の少年を求めて

『フィラデルフィア・ファイアー』の冒頭は、海辺の町を襲った嵐の描写から始まる。場所はギリシャ。主人公の黒人作家カジョーは、妻や子供たちと別れた後に、南仏やスペイン、北アフリカを放浪し、それからエーゲ海のコノス島(ギリシャ領)に滞在していたのだ。海の嵐の描写は印象的であると共に、その激しさは、後に描かれる爆発事件の暴力と通じるものがある。

また、海の嵐の描写と共に、海外生活中での恋人のことや、亡くなった祖母についての記憶も挿入される。

このように、異国での生活や故人である家族についての断片的な描写の後に、周縁から徐々に中心に迫るようにして、本題である爆破事件のことが語られる。その爆破事件こそカジョーを故郷に帰らせたものであり、彼がそれについての本を書こうとしているものなのである。「彼はページをめくる。おそらく本を膝の上に開いたまま眠ってしまったのだろう。自分で書きたいと願っている本、海を渡って見つけ出そうとしたあの物語。彼を故郷に連れ戻した、火事と行方不明の少年についての物語を」(7 和訳は筆者)。

『フィラデルフィア・ファイアー』において扱われている爆破事件は、1985年5月13日に、西フィラデルフィアで起こった。MOVEと呼ばれる組織の本拠地に対して州警察が立ち退き命令を出し、銃撃や放水砲などの威嚇を行ったが、組織が立ち退きを拒んだため、州警察のヘリコプターが爆弾を落とし、それに引き続いて火災が起きた。その攻撃によって、組織のメンバーの黒人11人(大人6人と子供5人)が殺されたのだ(97)。

この事件に対して強い関心を持ち、それについての本を書こうとしたカジョーは、MOVEの元メンバーで、事件のことを知る黒人女性マーガレット・ジョーンズ(Margaret Jones)に対して取材を行う。ジョーンズはカジョーに対して、仲間が無残に殺されたことによる、やりきれない思いをぶちまける。「いまだに信じられないわ。11人が殺されたなんて。赤ちゃんだろうが、女の人だろうが、おまわりたちは構わなかったのね。11人の人間がどうして死ぬはめになったの?教えてちょうだい。どうしてあいつらは私の兄弟姉妹たちを殺さなくちゃいけなかったの?ゴミを焼くみたいに焼き払ったのよ」(17)。

弾丸、爆弾、水、火といった手段を用いて、撃たれ、吹き飛ばされ、焼かれ、溺らされた仲間たち。その事件の中で、シンバ・マンツ(Simba Muntu)という名の1人の少年が生き延びたことを彼女は語る。「シミーちゃん(Little Simmie)ね。あの子のことはシミーと呼んでいたわ。シンバ・マンツを約束した呼び名よ」(17)。少年の母親は事件で焼き殺されたが、少年は現場から脱出した。しかし、命を助かったこの少年も、その後の或る日、行方不明になってしまったのである(33)。

この爆破事件については、政府やマスコミが隠べい工作を行って、事件の真相を歪曲して黒人側のせいにしようとしたり、あるいは、事件の痕跡を抹消しようとしていることが示唆されている(42, 48)。

一方、シンバ少年は爆破事件の唯一の生き残りであり、生き証人である。シンバの失踪は、事件の痕跡が失われてしまったことを示唆する。カジョーがシンバを探し求める行為は、失われたものを取り戻そうとすることと同義なのだ。

ここで、「失踪者の調査」というパターンは、ハードボイルド探偵小説において頻出する物語構造である。探偵は失踪者を探し求める中で、その失踪事件の背景にある現代社会の暗部を探究していくことになる。ただし、『フィラデルフィア・ファイアー』の場合は、失踪者の調査を頼む依頼人は存在せず、カジョーは自らの意志で調査を開始する。いわば依頼人は自分自身であり、カジョーは探偵かつ依頼人の役割を同時に演じるのである。

### 3. 社会的システムの被害者かつ加担者／犯人

マーガレット・ジョーンズの取材において注目されるのは、MOVEの指導者である「キング」(King)という男についての話である。まず、キングの説く「聖なる生命の樹」(the holy Tree of Life)という教えについて、ジョーンズは以下のように語る。

あの人 [キング] は私たちに聖なる生命の樹について教えた。我々は皆、その樹の一部として生まれたのだ。我々は皆一つの家族なのだ。けれども、この社会の腐ったシステムは生命の樹を切り倒そうとしている。社会は健康を憎むのだ。社会は強い人間を好まないのだ。社会は人間を利用しつくすために、人間が弱くて病的であることを好むのだ。生命の樹の育つ余地はない。社会はお前たちの生命の樹液を奪い、病的にして、生命の木を枯らそうとしている。

彼は私たちに対してお互いを愛し尊重するように教えた。我々自身の内にある生命を尊べ。生命は善であり、ゆえに我々も善である。彼は毎日そう言った。生命を守り、生命を受け継がせよ。そうすれば生命の樹は決して枯れることはない。社会的システムは何もかも殺してしまう。赤ん坊。空気。水。地球。人々の身体と心。私たちは種子なのだ。彼は教えた。私たちは自分の内にある生命を伝えていかねばならない。社会がその内部の毒によって滅びても、私たちは存在し続け、生命の樹は一層大きくなり、ついにはこの広い地球全部が生命の樹の下、一つの平和な庭となるだろう。彼は私たちに生命を讃えるように、生命そのものとなるようにと教えた。(10-11)

ここでは、「生命の樹」対「社会的システム」という対立関係の構図が示されている。

しかし、注目すべきは、キングがいわゆる崇高で清浄な「聖人」としては描かれていないことである。ジョーンズがキングの姿を初めて見かけたのは、仕事を終えて家に帰る途中であったが、キングはドレッドヘアをしたひげ面で裸足の貧相な男であり、薄笑いを浮かべたキングの放つ悪臭に彼女は閉口している。「・・・けれどもこの男 [キング] が建築用ブロックの上に背筋を立てて座り、自分に満足し、ジャングルのように顔一面を覆っているオランウータンのような髪の間から笑顔をのぞかせている様子は、まあ聞け、この悪臭は俺のものだと言っているかのようだった。俺はここで王座に座っている悪臭の王だ。走って逃げても身を隠すことはできないぞ」(12)。

ジョーンズはキングの放つ悪臭に辟易して、それから逃れようとする。しかし、それでいて、キングと初めて目を合わせた日から3カ月後には、彼女はもうキングの組織の一員となっていたのだ。

ここで、キングの放つ悪臭の意味とは何であろうか。それは、あるいは、キングの教えの持つ新興宗教的な怪しさを暗示するものかもしれない。しかし、その悪臭に閉口しながらも、ジョーンズが結局教団の一員となってしまうのはなぜだろうか。

それは、彼女やその母親といった黒人たちの状況に原因がある。ジョーンズは仕事で疲れ切って家に帰る途中で以

下のように思う。「机で仕事をしているのに奇妙なことに脚が痛み、それで母さんが白人連中のために家政婦をしていたことを思い出す。母さんの脚もいつもひどく痛んでいたけれど、この私は多少なりとも学位があり、一日中座っていても、母さんと同じに脚が痛んでくる。たぶん何にせよあの忌々しい貧乏白人連中のために働いたりするからこうなるんだろう」(12)。

ジョーンズは家政婦をしていた母親と異なり、教育や学位があるが、それでも黒人としての自分の状況の改善を実感できないのである。彼女がキングと出会ったのは、そんな時だったのだ。

私の人生はママのとあまり違わないし、ママの人生はそのまたママ、さらにそのまた母親たちの人生とあまり変わらない。夜明けに畑に出て、丸々一日綿花を摘み、足を引きずって小屋に戻って食べて寝て、翌朝巻貝の笛が鳴るとまた起きる。くそつたれ。事態は良くなっていくはずじゃなかったのか？ずっと先まで行けばどこかで良くなるはずだ。そうでなければ、こうしてあくせく働く意味がどこにある？草むらにしゃがんで葉っぱで尻を拭く必要はもうない。家には水道が通っているし、スーパーマーケットでは30種類のソーダ水や12色の色違いのトイレットペーパーを買うことができる。しかし私はそれを進歩とは呼べないんだ。あなたはどうか？キングはそれが進歩でないことを知っていた。キングは正に真実を語っていたのよ。(14)

つまり、ジョーンズにとって、キングの教えは、社会的システムがもたらす見せかけの進歩に対する疑問符であったのだ。

ジョーンズは、母親の世代の黒人とは異なり、教育を受けているのだが、その反面、いつの間にか自分自身が社会的システムの中に取り込まれ、システムの維持に加担していた可能性がある。その矛盾を突いたのが、キングの教えだったのである。

黒人が教育を受けることによって或る意味で白人化し、システムに加担してしまう可能性は、主人公であるカジョーにもあてはまる。カジョーは作家であり、大学でも教えた経験を持つ知識人である。カジョーは黒人かつ知識人・作家という、複数のアイデンティティの中で揺れ動く存在なのだ<sup>21</sup>。しかも、カジョーは白人の女性と結婚して子供をもうけた上で、その妻と別れている。そのことを彼は自ら2重の裏切りとして感じており、その罪の意識がジョーンズとのインタビューにおいても現れる。「どうやって彼女 [ジョーンズ] は、いや、彼女だけではなくその姉妹の全員が、少し話ただけで彼についてこれほどのことを知っていたのか？彼の過去、つまり白人女と結婚して半分白人の血の混じった子供たちの父親になったことを彼女たちはどうやって知ったのか？彼が妻を見捨て子供たちを見捨てたこと、つまり彼が黒人であることと一人の男であることについて二重の裏切りをしたことをどうやって知ったのか？」(9-10)

自らが社会的システムの被害者であると共に、システムの維持に加担している側面がある。現代の社会的システムの中に生きる人間は、こうした被害者と加担者という両面を持つのだ。この作品を一種の探偵小説として考えた場合、被害者と犯人という形で単純に割り切れない点に、その現代的な性格が表れている。

#### 4. 都市の明暗と探偵小説

『フィラデルフィア・ファイアー』はフィラデルフィアという現代の都市を舞台にした都市小説としての側面を持つ。

まず、この作品中で、都市は1人の巨人に喩えられている。「仮に都市を1人の人間、何マイルにもわたって仰向けに横たわる巨人としてみよう」(20)。さらに、都市の内部は巨人の内臓と見なされている(21)。ワイドマンは短編“Fever”の中で、疫病に襲われたフィラデルフィアの姿を描いているが、その中で、解剖された人間の臓器の即

物的描写が印象的である(146)。都市は1人の巨人であり、疫病に襲われた無秩序状態の都市は、いわば病にかかった巨人の姿である。疫病に蝕まれた人間の臓器は、巨人である都市の内部の暗黒面と対応するのである。

また、都市という1人の巨人は、それ自体の「意志」を持つ。例えば、カジョーは公園のコートで暗くなるまでバスケットボールをした後、夜のフィラデルフィアを歩き、高台の博物館から、市役所などのある中心街を見渡す。そこでカジョーが感じ取るのは、都市の持つ「鉄の意志」(an iron will)である。「夜の深い闇の中の博物館の濃い影にあるこの地点から見るとよく分かるが、或る鉄の意志が都市の形をとって威圧しているように思える」(44)。

そうした意志は、この都市を構想した設計者の思想に他ならない。「彼は都市の図案を描いた一つの手を見ることができた。(中略)彼は思想が設計に盛り込まれているのを見て取れた。一人の人間がこの丘の上に立ち、この眺めを心に描いたに違いない。茫漠たる無を都市の形にすることを夢見たのだ」(44-45)。

都市はまた、無数の「眼」を持つ。カジョーは都市の建物にある1つ1つの窓を都市の「眼」に喩えている。都市の数多くの窓は、その内部に住む無数の人々の生活に通じているのだ。「都市が毎朝目覚めるためには、百万の窓が開き、都市の眺めを枠にはめる必要があるのではないか？都市は百万の眼、様々な場面に開かれた無数の窓ではないか？」(53)

このように、都市はそれ自身の意志をもった1人の巨人であり、内部に内臓を持ち、また無数の眼を持つ。そしてカジョーは都市の持つ内部の秘密に魅かれていく。

とくに、夜の都市は昼間とは別の側面を見せてカジョーを幻惑する。夜の闇は事物を変貌させ(39)、おとぎ話のような世界を現出させるのだ。カジョーが探偵小説のことを想起するのは夜のフィラデルフィアを眺めながらなのである。「おそらくこれは探偵小説なのだ、とカジョーは心に思った。向こうには、強烈な楽しみとわくわくさせる可能性に満ちたおとぎ話の都市が広がっている。そこで消耗しきってしまうこともありうるし、実際多くの者がそうだったのだ。彼の仕事はいかがわしいものだ。まばゆい光、美しい人々、陰謀、恋物語。都市が与えるこうしたきらびやかな出来事には、トイレや下水、やくざ者、ゴミの山がつきものだ」(46)。

探偵小説は近代都市の成立を背景として誕生したと言われている。カジョーは、フィラデルフィアという巨人的都市の内臓(内部の複雑な迷宮)や、無数の窓の背後に隠れた人々の生活の秘密に対して探偵らしい探究心をそそられるのだ。

また、上記の引用文に描かれている、都会の明部と暗部の対比は、フィラデルフィアの再開発の問題とも関わってくる。市長は古いスラム街を整備して、美術館や大学を中心とした知的で美しい景観の都市に改造しようとしている。しかしそれには巨額の資金が絡んでおり、再開発に乗じて金もうけを企む連中もおり、金持ちはますます金持ちになって貧しい者はますます貧しくなるような、貧富の格差を拡大させつつある(79)。

ここで、市長の再開発計画にとって邪魔になるのがキングたちだったのである。キングたちは社会的システムや進歩を否定し、市や政府を無視し、時計の針を戻して森の中で暮らす人々のように生きたがっていたので、市長にとっては目の上のこぶのような存在だったので(81)。

そして、こうした市長とキングたちとの対立の結果として、あの爆破事件が起きたのである。つまり、事件の背景には、フィラデルフィアという都市の隠れた暗部が絡んでいる。政府やマスコミは事件の真相を歪曲し(42)、さらには事件の痕跡を抹消しようとするが(48)、事件のいわば探偵役としてのカジョーは、隠された真相を探究しようとする。そして作家でもあるカジョーは、「書く」という行為を通じて、事件の意味を一つの形にまとめてみようとするのだ。

##### 5. 喪失感—そして、精神的療法としての探究／探偵行為

『フィラデルフィア・ファイアー』の第1部では、主人公カジョーの家族や友人にまつわる様々な記憶が語られる。

とくに注目されるのは、カジョーが妻や子供たちと一緒に、友人の編集者サム (Sam) の住む島を訪れた際のエピソードである。

カジョーは妻のキャロライン (Caroline) や2人の子供たちと一緒に島に行くが、途中の車中やフェリーにおいて、妻との間に口論が絶えない。島に着いてからも、彼はサムの妻や娘と酒に酔って戯れたりして、自分の妻との関係は冷めたままである。

ここで、カジョーやサムの妻子についての記憶において顕著なのは、死と喪失の感覚である。まず、この島への第1回目の訪問の後に、カジョーは妻のキャロラインと別れてしまい、妻は別の男性と一緒にになり、子供たちも新しい父親と暮らすようになる。妻子を失ったという喪失感と罪の意識はカジョーの深いトラウマとなるのだ。

また、カジョーの友人である編集者かつ先輩作家のサムの一家は次々と死んでいく。

サムのいる島を訪れた際に、カジョーはサムの娘カッサンドラ (Cassandra) が真夜中に海で泳いだ後に、屋外で月の光の下、シャワーを浴びている姿を目撃する (63)。カッサンドラは奔放で奇矯な性格であったが、その9カ月後にはメキシコで交通事故のため命を失う運命なのだ (65)。娘を溺愛していたサムも、カジョーが島を訪れて2年後には急死してしまう。「教えてくれ」(Teach me) (60) という、人生の不可解さに対する疑問のセリフを最後の言葉として残しながら、さらにその後、サムの妻レイチェル (Rachel) もがんで亡くなるのである (71)。

ここで注意すべきは、サムがカジョーの担当編集者であると共に、先輩作家、飲み友達であり、カジョーの「分身」(twin) とも言うべき存在であることだ。「・・・なぜならサムは彼の分身であり、酔った相棒、飲み友達、良心の声であり、舞台の袖で静かに爪を切り整えている彼の芸術の舞台監督だからだ」(64)。サムがカジョーの分身であるために、サム一家の死は、カジョー自身の家族の喪失と重ね合わされていくのである。

カジョーの喪失感、自分の家族や友人についての個人的なレベルにとどまるものではない。それは、アメリカにおける彼の世代の黒人全体の喪失感とも結びつく。

例えば、黒人を大学に入れるようにした、黒人に対する高等教育への援助 (academic welfare) について、カジョーの友人であるティムボー (Timbo) は以下の様な皮肉を言う。「高等教育への援助、今になって振り返ると、連中は俺たちをテストしていたんだと思う。一握りの黒んぼを試験管に入れて、よく振って泡立つのを観察したんだ。(中略)俺たちはモルモットだった。大学で俺たち [黒人] は何人いたか?全部で9人か10人にすぎない。ニグロたちがそれまで全然いなかった場所、いるものだと決して思われていなかった場所の只中に俺たちを置いてみたんだ。そうして試験管を振ったんだ」(76)。

ティムボーがこのような皮肉を言う背景には、黒人の状況が思うように改善されなかったという、現実に対する幻滅がある。カジョーやティムボーたちの世代の黒人たちは、事態が改善されるかもしれないと思えた時代にたまたま生きていて、自分たちには世の中を変える力があると信じていた (80)。しかし、その期待は裏切られたのである。「それで結局今ではどんな違いがある?おそらく何もないさ、カジョー。だんだん良くなっていくと俺たちはどうして信じていたんだろうな。そうした嘘を俺たちに与えた奴は誰だ?何だって俺たちは嘘を鵜呑みにしたりしたんだ?」(77)

このような幻滅を味わったうえで、ティムボーは市長に仕える仕事に就き、あえて社会的システムの側に立つ道を選んだ。

一方、カジョーは、喪失感を抱えたまま、それから逃れるようにして海外生活を送っていたが、今回の爆破事件を機にして本国に戻った。そして、その事件についての取材と執筆を通して、社会的システムの暗部を掘り下げ、自らの喪失感の正体を突き止めようとするのだ。とくに事件の唯一の生き残りである行方不明のシンバ少年については、「兄弟であり、息子であり、雑誌で爆発の火災のことを読んで以来彼の心に付きまとっている、失われた1本の手足」(7-8) という言い方をしており、自分の分身と見なしていることが分かる。行方不明の「失われた少年」(a lost

## 探偵小説としての『フィラデルフィア・ファイアー』

boy) (7), それは様々なものを失ってきたカジョー自身の象徴なのである。カジョーが行方不明の少年について調べるのは、自らの失ったものを回復させようとする試みなのだ。

『フィラデルフィア・ファイアー』の作品中では、結局、シンバ少年の行方は分からずに終わる。いわば、『フィラデルフィア・ファイアー』は、明確な結末を持たない探偵小説なのである。しかし、カジョーが事件について書き、自らの喪失感と向き合うことを通じて、一種の精神的療法が為されたのではないだろうか<sup>142</sup>。その意味で、事件の結末ではなく、事件の探求という探偵行為そのものに力点が置かれていると言えるだろう。

### 注

1. カジョーは黒人かつ知識人という立場から、この作品の第2部で、シェークスピアの『テンペスト』を黒人の子供たちを役者にして上演することを試みている。なお、経済学者アマルティア・センは、『アイデンティティと暴力』において、1人の人間が様々な集団に帰属しているというアイデンティティの複数性を重視している(3)。
2. この作品の終わりに、「火による死と再生」(196)という語句もあり、喪失感からの再生への希望も示されているようだ。

### 引用文献

Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. New Haven: Yale UP, 1966.

Wideman, John Edgar. "Fever." *Fever: Twelve Stories*. NY: Penguin, 1989. 127-61.

---. *Philadelphia Fire*. NY: Mariner Books, 2005.

上田和夫, 渡辺利雄, 海老根宏編『20世紀英語文学辞典』研究社, 2005年。

内田隆三『探偵小説の社会学』岩波書店, 2011年。

セン, アマルティア. 『アイデンティティと暴力—運命は幻想である』大門毅・東郷えりか訳, 勁草書房, 2011年。